

旅人が持ち寄った
村の媚草
食すれば
三日三晩休むことも忘れて
まぐわいに没頭できる
効能を持った草

西峯村（にしみねむら）。

この村は古（いにしえ）より、田畑で実る作物が豊富な村であった。

栄養ある作物が春になって実るたび、村人たちはその歓びを祝う意味、そしてこの先も天災や疫病によって村の“食”が滅してしまわぬことを祈る意味で、村の中心部の広場でお祭りをしていた。

その年も、豊作の祭りの季節がやって来た。

「あんたの畑でも今年はようさん穫れたみたいだなあ！」

「うちは昨年から小麦を植えてみてなあ。これがまた土壌によく合っていたみたいで豊作で豊作で！！」

「そうかあ！そりゃ食べても食べきれんほどだろうなあ！」

「嬉しい限りさ！」

「ハハハハハハ！！」

「エンヤソーレーー！！ハイハイハァイィィー！！」

「ヒューーヒュルリラーーー」

尺八を吹いて歌い踊り、浮かれ騒ぎ、ひたすら楽しむ村人たち。

昔から飢餓などとは全く縁のなかった幸福な村なのだ。

そんな村に、ある日一人の旅人が移り住んできたのだが、この旅人が持ち寄った“大きな種”を近所の村人たちが畑で育てたところ、誰もが腰を抜かすような大きな大木のような“草”が畑に生えてきたのである。

その成長は普通の草木とは比べ物にならず、まるで大勢が寝ずに短期間で作り上げた大きな粘土作品のようであった。

種を撒いてわずか1週間でみるみる成長したその巨大な草。

茎部分は木の幹のように太かったが、あくまで緑色をしていた。

大きく垂れ下がった葉っぱ。

無口で無愛想な旅人はその謎の植物の正体について一向に説明しようとしなかったが、草が最大まで成長してからようやく口を開いた。

「この葉っぱを切り取って食べてみるがいい。想像を絶するようなことが起こる」

旅人は大きな草を見上げながらそう言ったのだ。
そして彼はこう呟き、村の外れの小屋へと戻って行った。

「この植物は、人の“性”を操ってしまう媚草（びそう）だ」

旅人に自らの畑を貸し、旅人に種を撒かせた村人のヤスベエは隣でその言葉を聞いていた。

しかし、ヤスベエはどこの馬の骨かも分からぬ旅人のその言葉を怪しむことをしなかった。

そのことを不思議がった村人がヤスベエに理由を尋ねると。

「あいつは村へやってきて2日目、大雨で川が氾濫して橋が流れそうになった時があったろう。何も言わず助けに来てくれたのを俺は知っているんだ。俺は試しに食ってみるぞ！」

村人は確かに“食べられる草”と口にした。どうなるのかは分からなかったが、旅人に感謝していたヤスベエはその夜、嫁のミエと一緒に家の土鍋で作った水炊きにその草を入れて食べてみたのだ。

すると！！！！

「・・・なっ！！！！なんだこれは！！！！あ、熱い！！！！」

“性を操る”

という旅人の言葉は紛れもない真実であった。

この草は少しでも食べると、もはや己では制御不能なほどの性欲が体の芯から沸き起こり、男は女と、女は男と“まぐわい(セックスのこと)”を持ちたくてたまらなくなる。

そして一度まぐわい始めれば、もう昼夜関係なく3日3晩は寝ることも忘れて体の貪り合いに没頭するのだ・・・・・。

西峯村に謎の旅人がやってきて早2年が過ぎた。

現在あの旅人はいなくなったが、相変わらず西峯村の作物は豊作で、人々は幸福な日々を送っていた。

しかし、この村は“豊作の村”とは別の、いや、もっともっと大きな特徴を持った村に変わり果てていた。

“性欲の村”

“まぐわいの村”

性を操る媚草は村の畑のあちこちに実り、その大きな葉っぱの大部分は村人たちによってちぎり取られていた。

夜になれば村人たちは広場に集まった。

豊作を祈る祭りの為ではない。

明け方近くになるまで、激しい激しい“野合”に勤しむためだ。

夜だけではない。

“性の媚草”を食べた村人たちの淫欲は昼夜関係なく収まらず、さらには自分の配偶者さえ関係なく、性欲の存在する若人同士であれば誰でもと言った感じで、ひたすら淫欲を交換し合うのだ。

性欲の村と化した西峯村のとある一角・・・。

「んんむちゅうーーじゅばあ！！あはああ！！ダイゴロウさんのオチンポは相変わらず大きくて美味しいですわあ！」

「ありがとうオスズ！気持ちいいよ」

古びた小屋の中で、一人の男と5人の裸の女が汗を滴らせて交わっている。

———体験版はここまでです———